

Let's
乾田化

水田は積極的に乾かそう!

春作業が本格化する前に、田んぼに停滞している水を積極的に排水して、乾田化を促進してください。乾田化に取り組むことで、忙しい春も余裕を持って作業ができます。

乾田化のメリット

トラクター作業が楽!
ぬからず田面壊さない

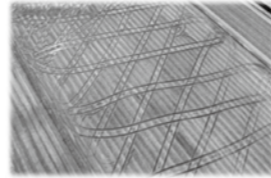
耕起→耕深の均一化
代かき→田面の均平化

有機物分解が進み
ワキが抑えられる

乾土効果発現で
下層のお宝(地力)発掘

サブソイル施工で下層透水性向上。
明渠施行で表面停滞水を排水。
暗渠の蓋っことも必ず確認を。

しっかりと水を溜められる畦畔がないと、生育管理、除草剤効果を得られません。水をしっかり張れるようになることで、除草剤拡散性が向上し効果が発揮。中後期除草剤削減でコスト低減が図れます。深水管理で太い茎に仕上げで登熟歩合向上、収量アップ!水を10cm以上溜められるよう畦畔を補強しましょう。



今年の豊作準備は今月からできます!

高温登熟、初期分けつ確保の課題克服のためには水管理が重要です。その水管理をやすくするための作業が本田準備です。ここをしっかりと行うことで豊作への第一歩を歩み出せます。

整地

田面均平することにより生育の均一化が図られ、水深が一定になることにより除草剤もムラなく効果が発揮されます。ほ場の残雪が高低差の目安になります。雪解け直前に確認をしてみましょう。

畦畔補修

稲づくりは水管理です。水を貯められる畦畔を造りましょう。漏水を防ぐことにより水持ちがよくなり除草剤の効果が高まります。深水管理ができ、自己拡散型除草剤(豆つぶ、ジャンボ、フロアブル、FG剤等)の均一な拡散となるほか、中干し前の深水管理で有効茎歩合の高い太茎が育ちます。また、畦畔際から侵入する雑草(アシカキ・イボクサ等)を田植え直後からの侵入を抑えることができます。



省力減農薬育苗の決定版 プール育苗

準備するもの

- ・厚手のビニールシート(ブルーシート等)。16箱/坪が目安です。
- ・プールの額縁となるような板(高さ10cm以上)と板を押さえる杭等。

プールを作る

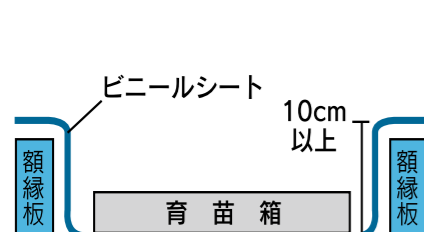
- ・ハウス内地面を出来るだけ水平に均し、シートを広げる。
- ・育苗箱を並べてから、育苗箱の周囲を板等で押さえてプールを作る。
- ・プールを細かく区切ることで高低差少なくできます。

管理

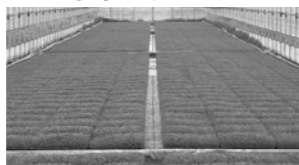
- ・プールへの入水は緑化期後1.0~1.5葉になったら、床土上まで入水します。
- ・箱下に水が無くなる部分が現れたら注水し、湛水深は床土上1cmまでとして、草丈の1/3以上の深さにはしません。
- ・プール育苗は草丈が伸びやすいので、低めの温度管理とし入水初期から昼夜ともに開放管理とします。ただし、外気温が5℃以下となる場合は保温してください。
- ・落水は、田植え2~3日前におこないます。

注意点

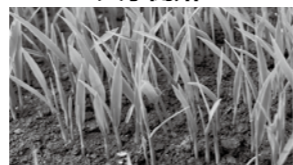
- ・箱上までしっかりと湛水しないと病原菌が発生しやすくなります。病害発生した場合は、直ちに落水して通常の育苗管理に切り替えてください。
- ・プールの排水は、育苗ハウス後作残留農薬対策としてハウス内土壌に浸透しないように注意してください。



細かく区切って
高低差少なく



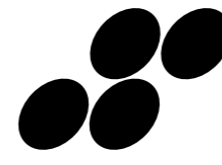
これくらいになったら
入水開始



箱上まで
しっかり湛水



No. 1



安心のネットワーク
NOSAI

農業技術情報

令和6年3月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



令和6年度 稲作の重点ポイント 課題山積み!土づくりを起点とした基本技術の徹底を

土づくり

長年、ケイ酸資材や堆肥を継続的に投入し「土づくり」を実践してきた産地では異常気象の影響を軽減できています。温暖化気象下での稲作では「土づくり」が欠かせません。異常気象下でも生育を止めない、強い土壌となるように肥料投入の他にも、透排水性を改善したり、根域を意識した耕起代かきをしたりと物理性改善も有効な手段です。圃場に合わせた土づくりを行いましょう。

異常還元対策

今年は、例年のワラに加えて、ひこばえも加わり異常還元(ワキ)が発生しやすいと予想されます。春先に乾田化促進をしてから、耕起作業に臨みましょう。初期生育不足改善の第一歩として、ワキ対策は最重要です。土中に酸素を供給するイメージで、乾田化促進し、飽水管理、ケイ酸資材に多く含まれるアルカリ分を補給することが有効です。

雑草対策

昨年残草してしまった田んぼには大量の種子が落ちており、今年必ずまた生えてきます。除草剤効果を発揮できるように、畦畔補修や耕起代かきから丁寧に行いましょう。雑草は代かき後から生育開始するので、散布遅れにならないように初期剤+一発剤、場合によって一発剤+中期剤の体系処理をしてください。

令和5年産水稻種子のご利用にあたっての注意点

令和5年産の種子の発芽率は、例年並みの90%以上であることを確認していますが、昨年は過去に経験のない高温で登熟したことから、休眠が深くなっていると思われます。浸種・催芽をより丁寧に行わなければ、発芽不揃いを引き起こす可能性があります。例年よりも、より確実な浸種、催芽作業を心がけてください。

浸種

浸種水温は10℃以上としてください。
特に最初の水温はお湯で調整するなどして、種子を入れた時に水温15℃くらいになるようにしてください。また、例年どおりの浸種日数ではなく、籾殻から胚芽が透けて見えるようになったか必ず種籾の様子を見て浸種完了の判断をしてください。

催芽

催芽前には、種子袋の内側と外側に温度ムラがないように温水(36~40℃)で湯通ししてください。その後も適正温度(30~32℃)になるようにして催芽をします。32℃を超えともみ枯れ細菌病発生の危険性が高まりますのでご注意ください。

安心のネットワーク
NOSAI から

園芸施設共済

春の嵐に備えて **水稻育苗ハウスにご加入を!**



なんといつでも
安心が一番!

被覆、未被覆期間を補償する周年加入です。
(被覆期間は1ヵ月から選べます。)

※詳しくはNOSAIまで TEL 0187-63-1066

作業は計画的に行おう

4月いっぱい低温の危険性があるため、浸種や種まき、育苗は田植え予定日から逆算して行くと、作業に余裕が生まれてきます。田植え後も生育を観察し、適期作業ができるよう、今後の作業を見える化していきましょう。

| 苗の種類 | 田植え予定日 | 育苗日数 | 播種日 | 陰干し | 催芽 | 浸種期間 |
|-------|-----------|---------------|-----------|------|---------|-------------|
| 稚苗 | 5月15日～20日 | 25日 | 4月25日～30日 | 1～2日 | 播種2～3日前 | 播種日の13～15日前 |
| 中苗 | 5月20日～25日 | 35日 | 4月20日～25日 | | | |
| 自分の計画 | 5月 日～ | 田植え日 △育苗日数 | 4月 日 | | 4月 日 | 4月 日～ 日 |

病害リスクの少ない清潔な環境づくり

作業場内や育苗施設周辺にある稲わらや籾殻、ほこりには昨年の病原菌が付着している可能性があります。あらゆる病気の伝染源になってしまいます。本格的な作業に入る前にしっかりと清掃を行い、病害リスクを低くしましょう。

種子保管

風通しが良い日陰で、直接地面に置かないように注意します。

清潔な水を使用

栽培期間中に使用する水は水道水や、井戸水を使用します。

品種取り間違いに注意

近年は取り扱う品種が増えてきています。誰が見ても分かるよう品種毎に色等で区別して管理し、取り扱いをします。

資材消毒

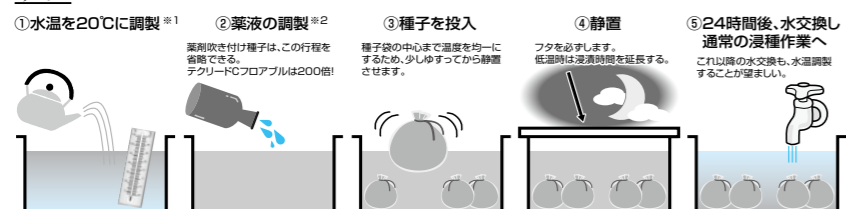
もみ枯細菌病対策として資材消毒剤「ケミクロンG」「イチバン」を使用して、種子予措、育苗作業に使用する器具や容器を全て消毒します。



薬剤を効かせる種子消毒

種子更新を必ず行います。ヘルシードやテクリードC薬剤吹付け種子は、浸種により薬剤が水に溶け、それを吸水することではじめて消毒効果が発揮されます。水温が低いと消毒効果が十分に発揮されませんので、最初の水温をお湯で調整する必要があります。

県外産種子を含めて無消毒種子を消毒する場合は防除効果の高いテクリードCフロアブルを使用します。



※1 種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高め水温に調整します。
※2 ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になり生育抑制につながる場合があります。

水量は種子 1 kg : 水 3.5 ℓ

1回目の水交換後、
2～3日おきに交換

温湯消毒種子は清潔に取り扱いを

温湯消毒種子は無菌状態の種子なので、保管から浸種後も清潔に保つことが重要となります。

温湯消毒種子と他の種子は分けて取り扱う。

泥、水、ホコリ、ゴミと触れないように保管。

使用する水は水道水か井戸水。

水量は種子量の2倍。

浸種期間中は基本的に毎日水交換。

浸種期間中は水の循環は絶対に行わない。

タフブロック使用時の注意点

- 催芽直前に200倍希釈液で24～48時間浸種、または催芽と同時に200倍希釈液で24時間処理。(催芽状況により早めに終える場合があるため処理時間に注意する。)
- ダコレート、ベンレート播種時処理は行わない。

苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態で稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃と種子消毒、育苗期防除を組み合わせることで清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みは絶対に阻止します。

| 薬品名 | 防除時期 | 使用基準 | 使用回数 | 備考 | タフブロック併用 |
|----------|-----------|----------------------------------|------|-----|----------|
| ベンレート水和剤 | 播種時～播種7日頃 | 500倍液 500ml/箱 1000倍液 1000ml/箱 | 1回 | かん注 | × |
| ビームゾル | 緑化始期 | 500倍液 500ml/箱 | 1回 | かん注 | ○ |

※ベンレート水和剤の苗いもち防除時は使用回数1回までです。 ※タフブロック使用種子では使用しません。

もみ枯細菌病にご用心

育苗期間中が高温となる年が多く、もみ枯細菌病の発生が年々増加しています。もみ枯細菌病は、高温管理で発生が助長され、葉の基部が白化、苗の基部は褐変腐敗して茎葉は簡単に抜けるようになり枯死していきま。もみ枯細菌病は温度管理が第一の発生原因で、その他環境要因が複合的に重なって発生します。また、一度発生すると翌年も発生しやすくなるため、必ず対策をすることが肝心です。

対策①テクリードCフロアブルで種子消毒

万病対策は種子消毒から。もみ枯細菌病に登録のある「テクリードCフロアブル」で種子消毒します。ただし、薬液濃度が薄くなると効果が不十分となり病害発生します。反対に濃いと薬害を引き起こす可能性があるため、正しい薬液濃度で処理をしてください。テクリードCフロアブル：200倍液 24時間浸漬

対策②使用する資材を消毒

一度発生させてしまった病害は、病原菌が育苗箱や被覆シートに潜んでいる可能性があります。使用前に「ケミクロンG」か「イチバン」で消毒をしてから使用してください。「ケミクロンG」は金属が腐食する可能性がありますので、処理後は水道水等での水洗が必要です。イチバンは水洗い不要です。

対策③温度管理の徹底

催芽から緑化期までは「32℃」を超えない管理が必要です。水温、ハウス内温度の管理をお願いします。播種後、育苗器内や無加温出芽被覆物下の床土温度が30℃を超さない温度管理をしてください。また被覆期間を過剰に長くせず、出芽を見たら再被覆はしません。育苗ハウス置床後は過保護にせず、換気を良くして低温気味の管理としてください。

対策④エコフィットの使用

昨年、発病した方は「エコフィット」の使用をおすすめします。

- 【NG例】× テクリードC処理種子で催芽
- × ダコニールまたはダコレート播種時灌注処理

【その他】育苗培土に有機物が多いと微生物どおしの干渉作用によって発生が少ない傾向にあります。ハイフミンやアズミンを混和するのも対策のひとつです。

「エコフィット」適用表

| 作物名 | 希釈倍率 | 使用液量 | 散布時期 | 使用回数 | 使用方法 |
|----------|------|---------|------|------|--------|
| 稲 | 100倍 | — | 催芽期 | 1回 | 24時間浸種 |
| 水稻 (育苗箱) | | 500ml/箱 | 播種期 | | 灌注 |
| | 10倍 | 50ml/箱 | | | 散布 |

苗立枯病

床土に焼土や人工培土を使用していない場合、タチガレースM剤かナエファイン剤を使用してください。また、育苗期間中は、ハウス内温度を昼間30℃以上、夜間10℃以下にはしません。かん水などによってハウス内が蒸れないように適度に換気を行い、適切な温度・水管理を行い、苗立枯病の発生を防ぎましょう。

| 使用時期 | 農薬名 | 使用量・希釈倍率 | 散布量 (箱当たり) | 使用方法 |
|----------|-------------|------------|------------|------------|
| 床土混和 | タチガレースM粉剤 | 6～8g/箱 | — | 育苗培土に均一に混和 |
| | ナエファイン粉剤 | | | |
| 播種時 | タチガレースM液剤 | 1000倍 | 1ℓ | 土壌灌注 |
| | ナエファインフロアブル | 1000倍 | 500ml | |
| は種時又は発芽後 | タチガレースM液剤 | 2000倍 | 500ml～1ℓ | |
| | | 500～1000倍 | 500ml | |
| は種時から緑化期 | ナエファインフロアブル | 1000～2000倍 | 500ml | |

※タチガレースM剤はピシウム菌とフザリウム菌に効果。
※ナエファイン剤はピシウム菌とフザリウム菌、リゾプス菌に効果。ただし、出芽後処理はピシウム菌のみ。
※タチガレースM剤、ナエファイン剤ともに出芽後処理は防除効果が劣る。